芝蘭会報

第206号
発行所
一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会

〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主な内容

②新任あいさつ
③校友会・KMS－FUNDだより
④岩井一宏 医学研究科教授が日本学士院賞を受賞
令和3年度 春の叙勲
人事異動・会員訃報

京大創立125周年記念事業募金

令和3年6月19日（土）、令和3年度芝蘭会総会・評議員会・理事会が開催されました。

COVID－19感染拡大防止のため、オンライン（ZOOM）による実施となりましたが、役員、評議員をはじめ多くの代議員の先生方を含む総勢56名の参加が得られました。

会議の冒頭、湊 長博京都大学総長（芝蘭会理事）から京大創立125周年記念事業の趣旨・概要について、国際競争力強化・研究力強化・社会連携推進を柱に、次世代を担う優れた人材の育成を中心に据えている旨、説明が行われ、特に学生、研究者の教育研究環境の施設充実について取り組む意欲が示され、今後とも母校への変わらぬ支援と募金への協力を依頼されました。

湊総長の発言の後、岩井一宏会長から芝蘭会としても記念事業に全面的に賛同し協力していくことが提案され、異議なく了承されました。また、会議終了後に、芝蘭会会員並びに賛助会員（108病院）へ創立125周年記念事業への支援と募金協力の依頼文書を送付することが確認されました。

＊

当日の総会・評議員会・理事会の議案は、

（1）京都大学創立125周年記念事業について
（2）令和2年度事業報告について
（3）令和2年度収支決算並びに財産目録について
（4）理事、監事、評議員の選任について
（5）その他

の5件で、議案（1）については、高知支部の森 惟明評議員から大西三朗氏に評議員を交代することについての意見を求めたところ、異議なく承認され、選任された。

また、端 和夫氏、山本雄造氏、原 寛美氏、島本光臣氏、余語 郁夫氏、加藤静允氏、三輪聡一氏、松村忠史氏、松山榮一氏、中川正久氏、門田和紀氏、福井清氏、高橋晴雄氏、泰江弘文氏の各評議員の任期満了に伴う再任について、異議なく承認された。

議案（5）については、医学部学生の海外等研修助成について、COVID－19によりマイコースプログラムを海外で行うことが困難なため、国内の大学・研究機関で沖縄科学技術大学院大学のように教員・学生の半数以上が外国人で、英語により教育研究が行われる場合には、財源的に可能な場合は海外等研修助成の対象に含める旨の説明があり、審議の後、異議なく承認された。

議案の審議終了後、2件の報告があり、1件目は、京都大学医学部教育研究支援基金の募集状況についての報告、2件目は、京大病院の入院患者家族の芝蘭会館別館の客室利用状況についての報告があり、いずれも了承された。

次世代を担う優れた人材育成のために

湊 長博総長が芝蘭会総会・評議員会・理事会に出席し、募金協力を呼びかけ

任多数で同人が理事に選任された。

また、高折晃史理事、空地顕一理事が本総会の終結をもって任期が満了するため、改選する必要がある旨の説明が行われ、審議の後、異議なく承認され、選任された。

監事については、武藤 誠監事が本総会の終結をもって任期満了となるため、同人を再任することについての意見を求めたところ、異議なく承認され、選任された。

評議員については、高知支部は、上記のとおり。議案（2）、議案（3）については、教育助成事業、普及啓発事業、学術講演会等開催事業、産学連携推進事業について、活発な議論の上、原案どおり承認された。議案（4）については、湊 長博理事の辞任に伴い、後任の理事候補者に推薦された高橋良輔氏について選挙を行ったところ、信認された。

退任あいさつ

泌尿器腫瘍学と内視鏡手術の発展の立会人として

大津赤十字病院 院長
小川 修

私は1982年に京都大学医学部を卒業し、当時、吉田 修先生が主催されていた泌尿器科学教室に入局しました。1年間の大学病院と6年間の北野病院での泌尿器科診療の研修の後、1989年に大学院に入学しています。大学院では第二病理学教室にお世話になりました。当時は神戸大学から白血病の分子研究をされていた杉山武敏教授が着任されたばかりで、第二病理学教室で分子研究の出来る実験室の立ち上げをしながら、泌尿器科腫瘍の研究を開始しました。2年半の病理学教室での研究の後、ニュージーランドのオタゴ大学分子腫瘍研究室（Anthony Reeve教授）に留学、1993年に京大泌尿器科に助手として帰学しました。その当時は、まだ泌尿器科内の実験室では充分な分子研究が出来る体制が無く、また内視鏡手術も寺地敏郎先生（当時講師、前東海大学泌尿器科教授）によって開始されたばかりの時でした。要するに京大泌尿器科においては、泌尿器科腫瘍の分子研究、内視鏡手術ともに黎明期といえる時代でした。この黎明期には、泌尿器科の大学院生が基礎の研究室にたくさんお世話になりました。筧 善行先生（元 香川大学泌尿器科教授、香川大学学長）は生化学教室、羽渕友則先生（秋田大学泌尿器科教授）は私と同じ第二病理学教室、賀本敏行先生（宮崎大学泌尿器科教授）、木下秀文先生（関西医科大学腎泌尿器外科教授）と神波大己先生（熊本大学泌尿器科教授）は第一病理学教室、西山博之先生（筑波大学腎泌尿器外科教授）は分子病診療学教室で研究され、現在は日本の泌尿器科リーダーとして活躍されています。

私は助手として3年間働かせていただいた後、1996年に秋田大学泌尿器科へ助教授として赴任し、そこでも泌尿器科腫瘍の分子研究の立ち上げと内視鏡手術の導入をお手伝いしました。縁あって、1998年に再び京都大学に泌尿器科学教授として帰学しましたが、当時も分子研究、内視鏡手術ともにまだ黎明期を脱していませんでした。

教授就任当初、私自身は40歳と若く、外科医としての経験も充分とはいえなかったため、技術的にも確立されていない内視鏡手術を含む泌尿器科診療を指導できるか不安で一杯でした。そこで、自分自身を高める意味においても、診療における教室の方針を「泌尿器科外科手技の標準化と教育体制の確立」としました。また、2011年には当時の中村孝志病院長にお願いして手術支援ロボット（ダヴィンチ）の導入も行いました。2011年3月におこった東日本大震災の影響も若干受けましたが、安全なロボット導入が出来たのも「標準化と教育体制の確立」という診療科を挙げた経験が役立ったと思います。その効果もあってか、この20年間で京大泌尿器科、および関連施設の泌尿器科診療の平均的な実力は著しく向上したと感じています。

研究での目標は、若手をできるだけ大学院生として帰学させ、また留学を経験させて、帰学後に科内の研究室での指導が出来る体制を作ることとしました。在任中に約60名が博士号を取得し、そのうち25名が海外留学を経験しました。現在では、ほぼ全てのがんの基礎的実験が科内の研究室で出来る体制となっています。

京都大学には22年間お世話になり、4月からは大津赤十字病院に新米院長として着任しています。今後は、泌尿器腫瘍学と内視鏡手術の発展の立会人としての経験を活かし、日本赤十字社の「人道と博愛」の基本理念の元、地域医療の発展に尽力していく所存ですので、引き続き、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

京都大学総合博物館 2021年度企画展

医師になる！京都大学の医学教育

京都大学医学部医学科では、1899年の医科大学 開設以来、新しい医学を追求、創成していく医学者の視点と、臨床現場でよりよい診療治療を目指す医療者の視点を兼ね備えた「医師」を育成する役割を担ってきました。京都大学総合博物館では学内で保管された資料を中心に本学の医学教育の変遷を展示紹介する企画展を下記の日程で開催いたします。

観覧を希望される方はコロナ禍のさなかでもあり、博物館ホームページの予約サイトからお申し込みいただき、事前予約いただくようお願い申し上げます。

＊

会期
令和3年7月21日（水）～10月10日（日）
9時30分～15時30分
休館日：月、火曜日、夏季休業日8月18日（水）
開館は3部制になっており、
9時30分、11時30分、13時30分より
各2時間入場

会場
京都大学総合博物館（京都市左京区吉田本町）

問い合わせ
電話：075-753-3272
E-mail：info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp

オンライン予約サイト
http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/reservation-top

観覧料
一般 400円
その他は予約サイトをご覧ください。

主催 ● 京都大学総合博物館、京都大学医学部医学科
共催 ● 目黒寄生虫館

新任あいさつ

研究者に信頼される支援業務を提供し、優れた支援人材を輩出する場を目指す

京都大学医学部附属病院
先端医療研究開発機構
医療開発部 教授
永井 純正

令和3年4月1日付けで、医学部附属病院先端医療研究開発機構医療開発部部長・教授を拝命いたしましたので、芝蘭会の先生方にご挨拶申し上げます。

また、大学院医学研究科橋渡し研究推進学分野教授として、大学院教育も担当させていただくこととなりました。

私は平成15年に東京大学医学部医学科を卒業後、東京大学医学部附属病院、自治医科大学附属病院での各1年間の内科研修を経て、東大病院血液・腫瘍内科（第三内科）に入局致しました。血液内科を進路として決断するにあたっては、医学部学生時代より、現京都大学大学院医学研究科腫瘍生物学講座の小川誠司教授に大変お世話になりました。東大病院血液・腫瘍内科で臨床業務、基礎研究に従事し、学位取得後、自らの今後のキャリアを考えた際に、日本では基礎研究の実用化を専門とする人材が不足していることに危機感を抱き、平成23年に自らの意思で医薬品医療機器総合機構（PMDA）に転職しました。PMDAでは、新薬審査第五部で抗がん剤の承認審査、治験相談に従事するとともに、当時PMDA内に新規に設置されたコンパニオン診断薬ワーキンググループに在籍し、コンパニオン診断薬の薬事規制の構築に尽力しました。平成26年に東京大学医科学研究所に異動し、小澤敬也教授の下で白血病に対するCAR−T療法、神経難病に対する遺伝子治療の開発に従事後、平成30年からは東大病院TRセンター講師として、AMED橋渡し拠点としての東大拠点における実務を陣頭指揮する役割を担ってきました。抗がん剤、診断薬、再生医療に関する薬事規制・開発の知識、橋渡し拠点運営の経験を活かして京都大学での業務を行っていく所存です。

私が部長として着任した医療開発部は、皆様の優れた基礎研究成果を臨床試験の段階に至るまで開発を進めていく部分を支援することを主な業務としています。すなわち、皆様に信頼されて支援を依頼いただかなくては我々の業務は成立しないことから、まずは皆様からより一層信頼され、安心して支援を依頼いただけるような組織になるべく、着任後努力をしているところです。そのためには、スタッフの専門性を高め、優秀な支援人材を持続的に確保、育成していくことが重要です。

その一環として、着任後、医療開発部の組織を医薬品・再生医療支援ユニットと医療機器・体外診断薬支援ユニットの2つに再編し、スタッフの専門性醸成、研究者からの支援依頼、の両方にとって有益となるようにしました。また、多くの大学では、私のような若手・中堅の人材が不足し、支援人材の多くを製薬企業出身のシニアに依存していることから、長期的な展望を描けずにいます。医療開発部を、大学院教育とも連携しながら、優秀な支援人材を育成、輩出し、日本の橋渡し研究エコシステムの中心となる場とできるよう、努めていく所存です。

こちらからの積極的な情報発信はもちろんのこと、皆様からも医療開発部へ支援依頼のご連絡をお寄せ頂けますと幸甚に存じます。

芝蘭会の先生方におかれましては、ご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

確かな技術と強い発信力を持つ外科をめざして

京都大学医学部附属病院
消化管外科学 教授
小濵 和貴

2021年3月1日付で消化管外科学教授を拝命いたしました小濵和貴です。芝蘭会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

私は1995年に京都大学医学部を卒業、北野病院などで外科医としてのトレーニングを受けました。2002年からは東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センターに出向し、消化器がんにおけるゲノムワイドな遺伝子発現解析・機能解析を行って腫瘍学の研究に没頭いたしました。2006年にふたたび臨床に戻った後、2010年には韓国ソウルのヨンセイ大学外科へ臨床留学いたしました。そこで当時ほとんど日本では行われていなかったロボット支援胃がん手術に出会い、「今後の外科手術はロボットが主流になる」と確信いたしました。

帰国後、ロボットを用いた安全確実な手術手技を定型化して確立し、京都大学医学部附属病院をはじめ国内の約40病院のロボット支援胃がん手術の立ち上げにかかわることで、安全なロボット支援手術の普及に貢献してまいりました。また、安全で精確な手術技術は直接患者さんの予後に寄与することから、京大外科グループ全体としての技術力の向上にも努めてまいりました。

さて、消化管外科領域の臨床研究において、アジア・欧米のハイボリュームセンターに伍していくためには、大学だけではなく関連病院とも一致協力していかなければなりません。2017年には京都大学外科関連病院の臨床研究グループを組織化し、一体となってエビデンスを創出するプラットフォームを作り上げました。現在はまだ大学主導で動いてはいますが、将来的には全体として強い発信力を持ったグループに成長していくと確信しております。すなわち、体系的に臨床研究を学び実践した大学院生が関連病院に赴任し、後輩への指導を通して若手外科医のリサーチマインドを涵養することで、京都大学外科関連施設から優秀なアカデミックサージャンが数多く育っていくと考えています。そして帰学して大学院でリサーチを学び、さらに成長して指導者となっていく、そういった大学と関連施設のエコシステムを継続的に発展させることで、地域医療にもエビデンス創出にも貢献できると考えています。

1899年から二講座制が続いていた京都大学外科は、2006年臓器別に再編され、消化管外科学が誕生しました。先代の坂井義治教授のもと、低侵襲手術手技の開発、消化管がんの基礎・臨床研究の推進、外科微細解剖の研究、医工連携研究開発など数々のテーマで卓越した成果が生み出され、多くのアカデミックサージャンが育ちました。今後はAIや大規模データベースを用いた研究もメインストリームになっていきます。私は2代目として、京大外科およびグループのさらなる発展、そして地域医療への貢献のため、研精不倦の精神で努力してまいる所存です。芝蘭会会員の皆様、ご支援ご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

薬物療法の適正化・個別化を目指して
協働の芽を育みながら

京都大学医学部附属病院
薬剤部 教授
寺田 智祐

2021年3月1日付けで、京都大学医学部附属病院薬剤部の教授・薬剤部長に就任しました寺田智祐と申します。芝蘭会員の先生方に、この場を借りてご挨拶申し上げます。

私は、平成6年（1994年）に京都大学薬学部を卒業後、京都大学大学院薬学研究科の大学院生として京大病院薬剤部の講座に進学しました。学位取得後、平成12年に薬剤部の助手として採用されました。大学院生の時には、トランスポータに関する基礎研究に取り組んでいましたが、現在では、臨床薬理学的な研究へとシフトしています。

薬剤部の教員に採用されてからは、抗がん剤のミキシングや当時の第一外科（現 消化管外科）の病棟を担当するなど、がん領域の担当者の一人として、薬剤業務にも携わっていました。ちょうど、がん専門薬剤師制度がスタートした時期とも重なり、全国から研修生を受入れ、各診療科の先生にがんの講義の依頼をし、その司会をしていたことが懐かしく思い出されます。平成20年に、副薬剤部長に配置換えとなり、薬剤部全体のマネージメントに関わるとともに、積貞棟の薬剤部門の設計や運用の構築に関わらせて頂きました。平成22年2月に、滋賀医科大学医学部附属病院薬剤部に異動したため、残念ながら積貞棟のオープンに立ち会うことはできませんでした。

異動先の滋賀医大では、院内における薬物療法の質的向上に取り組むとともに、地域の薬剤師・医師らとの連携強化にも注力してきました。また、平成28年に、医療法施行規則が変更となり、医薬品の禁忌・適応外使用の管理・運用が大きく変わりました。教職員一丸となって、正解のない課題をスムーズに運用させるシステムを構築していったことは、今でも貴重な財産になっています。さらに、滋賀医大在籍時には、職能団体や学術団体の役員、行政の各種委員会なども担当し、組織運用のノウハウについて勉強させて頂きました。

滋賀医大を経て、11年ぶりに京大病院に戻って来ました。積貞棟以降も、病棟などが続々とリノベーションされており、若干、浦島太郎のような気分ですが、日本屈指の舞台で仕事をできることに対して、高揚感と責任感を感じています。薬剤部は横断的な部門であり、どうしても医薬品管理や医薬品の安全対策など、管理的な印象が前面に出てしまいますが、現代医療や診療科の様々なニーズに対応するため、多職種との「協働」という芽を育みながら、京大病院における薬物療法の適正化・個別化に貢献していきたいと考えています。芝蘭会員の皆様には、大所高所の観点から、ご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

ご注意

最近、芝蘭会員の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報（住所、電話番号等）を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございませんので、くれぐれもご注意くださいますようお願いいたします。

なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合せはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。

芝蘭会事務局　TEL●075-751-2713　FAX●075-752-4015

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金（KMS-FUND）だより

〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学研究科事務部
総務企画課企画広報掛
TEL 075-753-4695
075-753-4322
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.med.kyoto-u.ac.jp

若手研究者の躍進を願い さらなる支援を充実

KMS−FUND 委員長（2021年）
耳鼻咽頭科・頭頸部外科学 教授
大森孝一

令和3年度も引き続き京都大学医学部教育研究支援基金（Kyoto University Medical Student and Researcher Support-Fund：KMS−FUND）委員会の委員長を拝命いたしました。よろしくお願いいたします。

KMS−FUNDは、平成19年に「学生の学習や研修活動などの教育支援、大学院生の研究活動などの研究支援」を主な目的として設立され発展してきました。基金創設によって、学生の御両親、御家族や同窓生である芝蘭会会員並びに教職員が、京都大学医学部における学生の学習・研究環境整備に貢献できる枠組みが整いました。

事業としては、医学部学生会館の建設（平成22年竣工）に始まりました。学生会館はクラブ活動の部室や24時間利用可能な自習室として活用されており、平成26年度からは清掃事業を業者委託し、備品修理やエアコンの追加設置も行いました。

学生の教育や研究活動支援としては、平成25年度より開始した医学部若手研究者優秀論文賞（KMYIA）は、毎年3名の大学院生、学生に医学研究科長からの表彰状と賞金20万円の副賞が授与されています。平成28年度より開始したMD研究者育成学生がMD研究者育成プログラムに進み、6年間のプログラム在籍中は毎年48万円の助成を受ける事ができます。また、京都大学医学部の臨床実習（ポリクリ）は5回生と6回生に行っており、関連病院の臨床教授の先生方に御指導をお願いすることも多々あります。学生にとっては第一線の市中病院で学ぶことができる貴重な機会ですが、京都大学の関連病院は、東は静岡県から西は福岡県まで広範囲にわたっており交通費や宿泊費がかかりますので、臨床実習助成金として学生1名あたり5万円を支援しています。

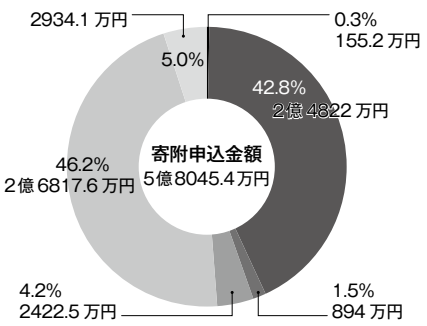
新型コロナウイルス感染症の流行にともない、令和2年5月から緊急学生支援寄附の受付を開始しました。これまで、オンライン授業教材の作成を助成し、新型コロナウイルス感染症の治療に従事する大学院生の休業補償の枠組みを創りました。さらに、生活に困窮する学生に対して、食生活支援プログラムを開始しました。

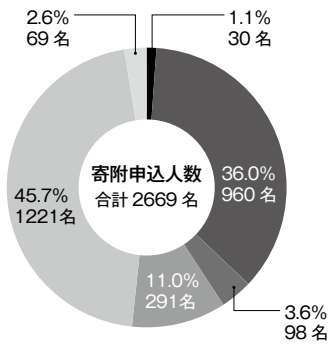
このように、KMS−FUNDは、学生の生活や勉学を広くサポートする施設整備と京都大学ならではの教育や研究に携わる学生へのサポートの両輪で事業を進めてきました。お陰様で、現在までの累計基金総額は6億円を超えました（寄附者数2721名）。皆様の御支援に心より感謝申し上げます。

京都大学医学部、医学研究科は、世界的な医学の教育、研究、医療機関をめざして発展していくべき使命がありますが、国内外の医学部に比べるとまだまだ改善していく課題が多くあります。そこで令和2年度からクラウドファンディングにより研究者を支援する仕組みを創りました。これに伴い、KMS−FUNDの英文正式名称にresearcherが入りました。これまで、「新型コロナウイルス感染症対策に関する日仏共同研究」、「上気道手術中の新型コロナウイルス感染拡大予防対策」、「"New normal"における病状説明の在り方の模索」、「CAR−T細胞療法におけるアフェレーシス効率の予測と最適化」の4件に総額1千万円を超える研究支援をいただいております。多くの方々からの御支援に感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の影響により、社会や医療の脆弱性があらわになっていますが、このような激変の時代におきましても、京都大学医学部は、医学や医療の課題を一つでも解決できますように一丸となって難題に取り組んでいます。KMS−FUNDでは研究者や学生が継続して世界的な研究成果を発信できるように、環境やシステムの整備につとめてまいります。

芝蘭会、校友会ならびに関係者の皆様方におかれましては、より一層の御支援を心より御願い申し上げます。





2020年12月31日現在

医学部生　医学科父母　人間健康科学科父母
教職員　芝蘭会員・OB　一般

令和3年教育研究支援基金（KMS-FUND）委員会委員

委員長	大森 孝一	耳鼻咽頭科・頭頸部外科学 教授
	斎藤 通紀	機能微細形態学 教授
	竹内 理	医化学 教授
	伊達 洋至	呼吸器外科学 教授
	中本 裕士	画像診断学・核医学 教授
	中山 健夫	健康情報学 教授
	山田 重人	人間健康科学系専攻生体構造学 教授
	山田 均	芝蘭会事務局長
	河野 矢英成	医学研究科事務部長

第14回京都大学医学部校友会 総会・講演会のお知らせ

日時　令和3年9月25日（土）午後
開催形態　オンライン「開催」
申し込み受け付けはおって連絡いたします。

令和2年度 卒業生代表あいさつ
医学界の大海原で みずからの道を拓く

加古敦也

本年度の卒業式は、新型コロナウイルスの影響により開催そのものが危ぶまれておりましたが、例年よりも規模を縮小することで無事、開催されました。祝賀会など、卒業を祝い語らう機会は自粛を迫られてしまいましたが、たくさんの方が卒業を祝ってくださったこと、芝蘭会館前の満開の桜のもとで、私たちの門出が華やかに彩られたことを、大変嬉しく思います。

この6年間は私の人生の中でも、最も濃密で有意義な時間でした。思い起こせば6年前、一念発起して京都大学の門を叩いた私は、これからどんな出会いが、学びが待っているのだろうと期待に胸を高鳴らせておりました。ただ自分の興味の赴くままに、好きなことを学ぶ。心がときめくがまま、これは面白そうだと思う様々な分野へと首を突っ込んではやっぱり違ったと撤退し、再び探求する。その場は大学のカリキュラムだけに留まらず、課外活動の中にも溢れていました。その一つ一つの学びの中で、自分の興味というものが洗練されてゆき、同時に自分の軸のようなものが形成されてゆく心地よい感覚がありました。京大生として歩んだ道のりは卒業生一人一人で全く異なりますが、各々が納得のいく刺激的な経験をしたことでしょう。

また、このような恵まれた環境で学生生活を送ることができたのは、紛れもなく両親のおかげです。初めて親元を離れて6年、楽しいことばかりではありませんでした。経済的な支援をしていただいたのみならず、そんなふと落ち込んだ時に心の支えとなってくれた両親への感謝の思いは、これからも忘れることはありません。

そして、この6年間を語るには欠かせない、貴重なたくさんの出会いがありました。研究室や臨床実習、課外活動でお世話になった先生方をはじめ、部活動や様々な場面で知り合った諸先輩方や後輩諸君、そして何よりも同級生の存在です。周囲を見渡せば誰かは何か面白いことを計画し実行している、とても楽しく、刺激的な環境でした。目的意識をはっきりと持ち、やりたいことに全力で取り組むという優秀さを、何度も行動をもって示され、その度に私も頑張らねばと鼓舞されてきました。京都大学で培った向上心と探究心を、卒業してからもしっかりと保っていきたいと思います。

そんな学生生活最後の今年度は、感染症の歴史に新たな1ページを刻む1年となりました。COVID−19拡大防止のために、自由な行動は自粛を要求され、それに伴って学生生活は肩身の狭いものにならざるを得ませんでした。海外を視野に入れて行動を起こしたい、日本の津々浦々で様々な体験がしたいというような、6年間の集大成としての行動を計画していた学生も少なくなかったことを鑑みると、京都大学が掲げている「自由な」学びの機会を例年と同じ様には得られなかったことは残念でなりません。

一方そのような状況下において、世界はこれまでに無いほど激変し、その中でも科学は着実に歩みを進めていました。例えば今回注目を集めたmRNA医薬品の開発技術は、このコロナ禍から人類を救う光となっています。さらには他の様々な疾患に対する治療への展望も期待されているというのは、大変喜ばしい事です。また、世界中の医療現場や、そこから溢れてしまったたくさんの人々は、大変な思いをされたことでしょう。たくさんの方が命を落とされました。その前線で奮闘する医療従事者の方々の姿には大変勇気づけられるとともに、来年からはこの最前線で働くのだという責任と緊張を感じずにはいられませんでした。さらに、医療とは社会に組み込まれたシステムであるという当然の事を再認識しました。政治や経済を含めた医療の流れには大変多くの人々が関わっており、そのバランスを保ちながら課題を解決していく事がいかに困難であるかを知りました。このように大変な盛り上がりを見せる医学・医療の大海原に、私たちはいよいよ飛び込みます。その中で揉まれながら、どう活躍し、どう生きてゆくのか、そこには「自由」が溢れています。かけていただいた期待に十分に応えられるように、これからも邁進して参ります。

最後になりましたが、私たちにご指導ご鞭撻くださったすべての方へ感謝申し上げますとともに、今後の京都大学医学部並びに校友会のさらなる発展を祈念申し上げて、卒業生代表の言葉とさせていただきます。

岩井一宏 医学研究科教授が日本学士院賞を受賞

このたび、岩井一宏医学研究科教授が第111回（令和3年）日本学士院賞を受賞することになりました。日本学士院賞は、学術上特に優れた研究業績に対して贈られるもので、日本の学術賞としては最も権威ある賞です。

岩井一宏教授は、平成4年に京都大学大学院医学研究科を修了し、医学博士の学位を取得しました。その後、京都大学医学部附属免疫研究施設助手、米国国立保健研究所（NIH）研究員、京都大学大学院医学研究科助手、助教授、同大学大学院生命科学研究科助教授、大阪市立大学大学院医学研究科教授、大阪大学大学院生命機能研究科・大学院医学研究科教授を経て、平成24年に京都大学大学院医学研究科教授に就任、細胞機能制御学分野を担当し、現在に至っています。

今回の日本学士院賞の研究題目は、「直鎖状ユビキチン鎖の発見とその炎症応答制御に関する研究」です。岩井教授は、新奇な直鎖状ユビキチン鎖と特異的な生成酵素であるLUBAC（ルーバック）を発見してその機能、疾患への関与を解明しました。

ユビキチンは生命現象を担う機能分子であるタンパク質を分解に導くシグナルであると考えられていましたが、岩井教授はまず、LUBACによって生成される直鎖状ユビキチン鎖がタンパク質分解ではなく、炎症応答制御をはじめとして、細胞生存などの多くの生命現象に中核的に寄与することを解明しました。さらに、直鎖状ユビキチン鎖の生成減弱が免疫不全を伴う自己炎症性症候群、その生成亢進がB細胞リンパ腫の原因となることも明らかにしました。加えて、多くの病原微生物が宿主に感染する際にはLUBACを抑制することなども判明しています。

岩井教授の研究はユビキチン、免疫応答制御機構の分野に新機軸を提供したのみならず、感染症、悪性腫瘍、免疫疾患の治療など、医学に新しい可能性を提示するものです。

なお、岩井教授の卓越した業績に対し、平成27年日本医師会医学賞、同29年持田記念学術賞、令和元年武田医学賞、同2年上原賞など、多数の賞が授与されています。

令和3年度 春の叙勲

❖瑞宝中綬章

松山 榮一（昭42年卒）
元国立病院機構姫路医療センター院長

米倉 義晴（昭48年卒）
元放射線医学総合研究所理事長

人事異動

R3.3.31	武田　俊一	辞任	放射線遺伝学教授
R3.3.31	笹沼　博之	辞任	放射線遺伝学准教授 ➡ 東京都医学総合研究所副参事研究員
R3.3.31	里村　一成	辞任	健康政策・国際保健学准教授
R3.3.31	小川　修	辞任	泌尿器科学教授 ➡ 大津赤十字病院病院長
R3.3.31	松本　久子	辞任	呼吸器内科学准教授 ➡ 近畿大学医学部内科学呼吸器・アレルギー内科主任教授
R3.3.31	鈴木　栄治	辞任	乳腺外科学准教授 ➡ 神戸市立医療センター中央市民病院部長
R3.3.31	赤木　忠道	辞任	眼科学准教授 ➡ 新潟大学医歯学総合病院准教授
R3.3.31	柚木　知之	辞任	初期診療・救急医学講師 ➡ 救急部准教授
R3.3.31	上田　敬太	辞任	精神医学講師 ➡ 京都光華女子大学教授
R3.3.31	田原　康玄	辞任	附属ゲノム医学センター特定教授 ➡ 静岡社会健康医学大学院大学研究科長・教授
R3.3.31	陳　和夫	辞任	呼吸管理睡眠制御学特定教授 ➡ 日本大学医学部教授
R3.3.31	伊藤　宣	辞任	リウマチ性疾患先進医療学講座特定教授 ➡ 倉敷中央病院主任部長
R3.3.31	高石　繁生	辞任	メディカルイノベーションセンターDSK（Ⅱ期）特定准教授
R3.3.31	大塚　篤司	辞任	外胚葉性疾患創薬医学講座特定准教授 ➡ 近畿大学医学部主任教授
R3.3.31	佐藤　泉美	辞任	薬剤疫学特定講師 ➡ 長崎大学教授
R3.3.31	中村　勝	辞任	附属ゲノム医学センター（疾患ゲノム疫学）特定講師
R3.3.31	橋本　求	辞任	リウマチ性疾患先進医療学講座特定講師 ➡ 大阪市立大学大学院医学研究科教授
R3.3.31	伊藤　克彦	辞任	医療安全管理部准教授 ➡ 京都先端科学大学教育開発センター特任教授
R3.4.1	塚本　博丈	採用	熊本大学講師 ➡ がん免疫総合研究センター特定准教授
R3.4.1	村上　孝作	採用	免疫・膠原病内科助教 ➡ がん免疫総合研究センター特定准教授
R3.4.1	野澤　孝志	昇任	微生物感染症学助教 ➡ 同准教授
R3.4.1	山本　洋介	昇任	医療疫学准教授 ➡ 同教授
R3.4.1	田近　亜蘭	昇任	精神科神経科助教 ➡ 健康増進・行動学准教授
R3.4.1	波多野　悦朗	採用	兵庫医科大学消化器外科学講座肝胆膵外科主任教授 ➡ 肝胆膵・移植外科学教授
R3.4.1	中川　正宏	採用	メディカルイノベーションセンター（DSKプロジェクトⅡ）特定准教授 ➡ 腫瘍生物学特定准教授
R3.4.1	佐藤　晋	採用	リハビリテーション科助教 ➡ 呼吸管理睡眠制御学特定准教授
R3.4.1	小金丸　聡子	採用	獨協医科大学医学部准教授 ➡ 脳機能総合研究センター神経機能回復・再生医学講座特定准教授
R3.4.1	中村　英二郎	採用	メディカルイノベーションセンター（DSKプロジェクトⅡ）特定准教授 ➡ がん組織応答共同研究講座（産学共同）特定准教授
R3.4.1	粟屋　智就	採用	外胚葉性疾患創薬医学講座（共同研究）特定助教 ➡ がん組織応答共同研究講座（産学共同）特定講師
R3.4.1	浅田　秀基	昇任	分子細胞情報学特定講師 ➡ 同特定准教授
R3.4.1	矢田　真城	昇任	臨床統計学講座特定助教 ➡ 同特定講師
R3.4.1	永井　純正	採用	東京大学医学部附属病院トランスレーショナルリサーチセンター講師 ➡ 先端医療研究開発機構教授
R3.4.1	森　由希子	採用	医療情報企画部特定講師 ➡ 同講師
R3.4.1	柚木　知之	昇任	救急部講師 ➡ 同准教授
R3.4.1	加藤　貴雄	昇任	先端医療研究開発機構講師 ➡ 同准教授
R3.4.1	石守　崇好	昇任	放射線診断科講師 ➡ 同准教授
R3.4.1	志水　陽一	昇任	放射線部助教 ➡ 同講師
R3.4.1	坂中　克行	昇任	放射線治療科助教 ➡ 同講師
R3.4.1	片岡　正子	昇任	放射線部助教 ➡ 放射線診断科講師
R3.4.1	伏見　育崇	昇任	放射線診断科助教 ➡ 同講師
R3.4.30	渡部　龍	辞任	リウマチ性疾患先進医療学講座特定助教 ➡ 大阪市立大学医学部病院講師
R3.5.1	中島　沙恵子	採用	皮膚科学講師 ➡ 炎症性皮膚疾患創薬講座（産学共同）特定准教授
R3.5.1	大西　輝	採用	神戸大学医学部附属病院助教 ➡ リウマチ性疾患先進医療学講座特定講師
R3.5.1	南谷　泰仁	昇任	腫瘍生物学特定准教授 ➡ 同特定教授
R3.5.1	髙田　正泰	昇任	手術部助教 ➡ 同准教授
R3.5.1	毛受　暁史	昇任	呼吸器外科講師 ➡ 同准教授
R3.5.1	亀田　隆範	昇任	眼科助教 ➡ 同講師
R3.5.31	武内　章英	辞任	形態形成機構学准教授 ➡ 愛媛大学医学系研究科教授
R3.5.31	中村　英二郎	辞任	がん組織応答共同研究講座（産学共同）特定准教授 ➡ 国立がん研究センター中央病院医長
R3.5.31	近藤　純平	辞任	クリニカルバイオリソース研究開発講座（産学共同）特定助教 ➡ 大阪大学大学院医学系研究科准教授
R3.5.31	近藤　英治	辞任	産科婦人科准教授 ➡ 熊本大学大学院生命科学研究部先端生命医療科学部門教授
R3.6.1	伊藤　功朗	昇任	呼吸器内科学講師 ➡ 同准教授
R3.6.1	河田　健二	昇任	消化管外科学講師 ➡ 同准教授
R3.6.1	池田　香織	昇任	糖尿病・内分泌・栄養内科助教 ➡ 先端医療研究開発機構講師
R3.6.15	矢田　真城	辞任	臨床統計学講座特定講師
R3.6.30	石守　崇好	辞任	画像診断学・核医学准教授 ➡ 北野病院放射線診断科部長
R3.7.1	中屋　百合恵	採用	メディカルイノベーションセンターTMK 特定准教授 ➡ 同センターSK（Ⅱ期）特定准教授
R3.7.1	神戸　直智	採用	皮膚科特定准教授 ➡ 同准教授

会員訃報

謹んでご冥福をお祈りいたします　　日付はご逝去日

寺井 健	昭和23年専卒	令和3年5月8日
端野 博康	昭和24年卒	令和3年2月15日
荒川 三郎	昭和25年卒	令和2年6月11日
森田 昭	昭和28年卒	令和2年5月31日
小田 幹郎	昭和28年薬卒	令和3年4月30日
石河 重利	昭和29年卒	令和3年6月26日
水谷 昭	昭和29年卒	令和3年3月28日
内田 耕太郎	昭和30年卒	令和3年6月6日
高坂 敏三	昭和30年卒	令和3年6月13日
多村 憲	昭和30年薬卒	令和3年2月7日
味田 保彦	昭和31年卒	令和3年6月14日
日下 昌平	昭和32年卒	令和3年6月13日
鈴木 忠明	昭和32年卒	令和3年4月20日
杉山 一郎	昭和32年薬卒	令和2年8月12日
岡田 長保	昭和33年卒	令和3年5月23日
柴田 大法	昭和33年卒	令和3年3月19日
森 徹	昭和33年卒	令和2年10月3日
横山 達郎	昭和33年卒	令和3年5月12日
立石 昭三	昭和34年卒	令和3年4月8日
余 昌英	昭和39年卒	令和3年3月24日
松尾 高明	昭和39年院卒	令和3年4月16日
池原 進	昭和42年卒	令和3年6月11日
石橋 達雄	昭和42年卒	令和3年4月9日
小川 博暉	昭和43年卒	令和3年6月8日
田村 正昭	昭和45年卒	令和3年3月13日
佐々木 秀樹	昭和46年卒	令和3年1月6日
田中 友二	昭和49年卒	
藤田 真弘	昭和59年卒	令和2年11月9日
村上 不二雄	教室会員　衛生学	令和2年11月29日
竹中 章	教室会員　産婦人科	令和2年6月9日
岡田 照子	教室会員　小児科	令和2年9月30日
田中 新一	教室会員　皮膚科	令和2年10月12日
白井 希明	教室会員　麻酔科	令和2年12月7日

事務局から

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取り扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては、会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますので、ご了承ください。

FAX 075-752-4015

原稿募集

＊＊＊

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であります。支部活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、送付先はFAX（075-752-4015）またはE-mail（info@shirankai.or.jp）でお願い致します。また、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会で決めさせていただきます。

芝蘭会報 編集委員会

芝蘭会報編集委員会
委員長　髙折晃史
委員　中村保幸、吉岡秀幸、清川岳彦、園部誠、松村由美、甲斐亜沙子、諫田淳也
芝蘭会雑誌部
顧問　髙折晃史
部員
（6回生）谷本将崇、小野譲騎、西垣利彦
（5回生）岡和來、西村健太、秋宗俊久、原明弘、森田瑛、吉村太貴、樺井良太郎、濱田草太
（4回生）奥野芳樹、青木ちひろ、福井貞孝
（3回生）三宅大河、小林空暉、小澤向陽、野洲春菜
（2回生）大島輝
芝蘭会事務局
事務局長　山田均
総務課長　秋山和美
管理課長　森勝二
制作協力　京都通信社
デザイン　納富進